
苦虫

青山 黒美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

苦虫

【Nコード】

N0964P

【作者名】

青山 黒美

【あらすじ】

僕には拭いきれない
過去がある

苦虫（１）

僕は帰ってきた

また

この生まれ故郷に

いつも

苦虫を噛んで…

バス停を降りると本格的な夏に入る前の気持ちの良い光が、風が僕を迎えてくれた。

一年に一度、この時期に僕は此処に帰ってくる。

蝉もまだ鳴いていない。夏なのか春なのか、どちらとも言えない季節に僕は妙に落ち着いていた。

此処には僕の住んでいた、子供時代の思い出を多く含んでいた家はもう無い。

既に壊されている。

年々この村から人は、いなくなり皆、隣町へと姿を消して行く。

寂しいとは思わない。むしろ僕は嬉しく思う。

あの時のまま、この景色を忘れずにいられる。

けれど、それも一瞬の感覚で僕は直ぐにその思い出を一枚の布で覆

い被せてしまう。

黒く透けた布で。

僕はこの村で友達を亡くしていた。

苦虫（2）

歩いて行く途中で僕は立ち止まった。

辺りには田畑が広がっているばかりだが、こんな場所にも思い出の断片は散りばめられていて、夕暮れ時まで外で遊んでいた事を思い出した。

僕は小学校のあった方を眺めた。此処からでは見えない、まだあるかどうか知らない。此処へ来た理由が、見るもの全てを小学生だった頃の自分へと結びつける。

そして、これから行く山を見て僕はゆっくりと息を吸って吐いた。

あの子の事は、そこに置いてきた。

小学四年生の夏

ダイスケ
大輔と

チサト

千里と

僕。

千里の墓へ

僕は歩き出した。

苦虫(3)

僕は歩きながら二人を思い出していた。

大輔は活発な奴だった。スポーツも得意で勉強も出来る。

それに比べて僕は勉強は駄目、スポーツもあまり得意では、なかった。下手でもなかったけど。

何度か、大輔が教室でケンカしているのを見た事がある。先生が止めに入って、大輔を押さえ付ける。

先生は必ず相手よりも、大輔を先に止めた。

相手よりも大輔の方が攻撃的で、大輔が先生に捕まると相手なんかは、ただ叱られるのを立って待っているだけだった。

僕は、ケンカなんて出来るような奴じゃなかった。どちらと言うとイジメられやすいタイプだったかもしれない。

僕と大輔は違ってた。

いま思えば、どうして大輔と仲が良かったのか……。一つの釣り合いと言っやっだろうか。

大輔が少し前を歩く。僕が少し後ろに付いて歩く。

僕には、大輔が羨ましいなと思う事があった。

僕には得意な事が見つからなくて、大輔が沢山それを持っていたんだから。

……千里も大輔が好きだったんだと思う。

苦虫（４）

千里……………。

僕は道端に、ふと目をやった。紫色の小さい花をたくさんつけた花があつた。

僕は肩から提げている鞆の間から、伸びている花を見た。
買ってきた花も紫色。

毎年、千里への花を選ぶ時になると、決まって紫に近い色を選んで
いた。

（黄色でも白でもない。紫…）

黒い髪を肩より少し先に伸ばして、白いワンピースを着ていたのを
思い出した。

母親が音楽の学校を出たとかで千里はピアノを習わされた。それが
嫌で学校から家には帰らず、カバンを道端に置いて、そのまま三人
で遊んでいた事もあつた。

そんな事をしていたら、千里の母親が何度か捜しに来た事があつて、
僕たちは見つからない様に逃げる遊びをやったりした。
けれど、長くは続かなかつた。

ある日、千里と母親が夜に家の玄関にやって来た。

僕と母親が出て、母親同士が話していた。何を話していたのか全く
覚えていないけど、千里の「ごめんなさい」が顔に表れていたのを
見て、僕たちが悪い遊びをしたんだなと思った。

その後から千里の母親が捜しに来る事は、なくなつた。

「今日は、練習があるから」

こう言う日が増えた。

千里は優しい。

僕らに迷惑を掛けないように我慢して、そう言っていたに決まっている。

僕の中の苦虫が、少し動き出した……噛み締めた。

苦虫(5)

僕は辺りを見回した。

遠くの方で農作業をしている人が見えるくらいで、人の影はそれくらいだ。

古い家と、まだ新しい感じの家がいくつか見える。それらは対照的に見せ、時の流れを感じさせた。

あの頃からあったであろう家と僕の知らない間に建てられた家。

元々この辺は家が少なかった。

小学校の向こう側あたりに住んでいる人が多かったから。

僕ら三人の家は、此処よりも小学校から離れてる場所に在って、このすぐ目の前の横道を三人で歩いて通学していた。

何を話していたんだろ？

学校終わったら何して遊ぶとか、今日の給食何だっけとか、テレビアニメ…そんな話をしていた。

三人の中では大輔が一番よく喋って、僕はそれを面白く聞きながら歩いていた。

千里も笑っていた。

始めて、あの山に入ろうと言ったのも大輔の言い出した事だった。

あの山の川で釣りをしている人を見たことがあるから、何か釣れるかもしれない。

僕は先生や親に、川へは近づいてはいけないと言われていた事を思い出しながらも、僕は大輔の好奇心と一緒にあって、そんな注意を無視して楽しそうだと思った。

千里も行くと言った。

小学四年の夏休み間近の事だった。

僕は横道まで来て、立ち止まった。
あの山の登り坂が近くに見える。

僕は躊躇せず、登り坂に向かって歩き出した。

苦虫(6)

僕は登り坂を歩きながら感じていた。

登り始めて少しすると道は平らになり、左に進路を変えて歩き始めた頃、辺りは急に暗くなった。左右の高い木々に日の光は遮られ、天候の良い日から今にも雨の降りだしそうな気配を感じさせる暗がりに姿を変えた。

この道の暗さが僕を責めている事は、容易に分かった。僕は怖いのだ。千里の墓へ向かう、この見覚えのある道が、この場所が。

僕は震えたい気持ちを抑えて、ただ前に前に歩いている。僕は卑怯に思ってしまった。

この山が無くなってしまえば…。

道が右向きに曲がり始めた頃、川の音が静かに耳に入って来て僕は戸惑った。

この道を曲がり切れば、川が見えるようになる。

見たくない。

それでも歩いて行くに連れて川の音は耳元で大きくなって、僕の過去の記憶も音と共に今に流れ着き、僕をあの日に押し込んだ。

僕は…何してる。

僕の視界に、穏やかに流れている川と、ポツンとある小さな長方形の石が入り込んだ。

僕は一度立ち止まり、暫くしてから淡々と石の前へと歩いて行く。僕の体は案外に軽かった。

過去からの風が起こした押し寄せる高い波は、此処へ来て一時的に止んでいた。僕と長方形の石に風は打つかり返り、波は一時的に止む事になったらしい。

考える事など許されなかった。

苦虫（7）

僕は石の前まで来て、川が流れて行く方向へ視線を川に乗せて、ゆっくりと流した。

千里はこの川に…。

僕は石の前に置いてある花を見た。まだ新しい紫の綺麗な花が錆び付いた円筒に咲いていた。毎年いくつか花は置いてあったけど、紫の花だけが置いてあるのは見たことが無かった。

…大輔。いや親が親戚だろうか。けど…大輔だと僕は勝手に決め込んだ。大輔も此処に来ている。そう思いたかった。

大輔とは千里が亡くなってから一度も口を利かなくなった。僕を無視していた。通学途中や学校で、すれ違う時、大輔が僕を見る事は無かった。まるで僕は僕には見えない人の様に存在していた。

少し辛かった。

それから大輔は、小学五年生の途中で何処かへ引越した。ウチの親の話では父親の仕事の都合だとか…。

僕は川を眺めた。

此処からだと言はれ見下ろす形になる。この道の先に川へ降りる下り坂がある、けれど僕は、この先へ行く事は無い。僕の中では此処までで終わっている。

この道の先は過去へと続いているんだから。

僕は、持って来た花を円筒には入れずに石の前に置いて行こうと決めて、しゃがみ込んだ。そして花を置いて立ち上がろうとした時、その際に僕の右腕が錆びた円筒の紫の花に当たって、トンツと音を

立てて転がってしまった。

僕は錆びた円筒を掴み花をすくい上げ立て直すと、紫の花びらが数枚、地面に散っていた。謝らなくてはいけないと感じながら紫の花に目をやると、筒の中に不似合いな白い色が写った。

僕は、紫の花の間から白いそれを引き出すと、誰かが故意に入れた手紙らしかった。裏表ともに何も書かれては無いけれど、紫の花を目の前にして僕の予感が必要に一つへと吸い込まれていく。

僕は手紙に付いている錆の粉を軽く手で払い、中から一枚の折りたためられた紙を取りだすと立ち上がって、広げて見た。

僕の予感は外れる事なく、少し恐怖にも似た感覚を帯びて心臓を打った。広げた紙には僕と大輔の名前が、黒く書かれた文字が並ぶ中で紛れなく浮き彫りにされて、今一番で入り込んで来た。僕は、その文章を自然と心臓の鼓動へ任せる様に読んでいたが、所々で不規則に打たれる心臓の高鳴りは、僕の時間を幾度も止めたり動かしたりした。

読み終えて僕は、川の音の方へ自然と視線を移していた。

川は流れている。夏の光を反射しながら。

僕は手紙を持って、川へ降りる坂に向かった。

苦虫（８）

手紙の内容は、僕を強く突き動かした。

書かれていた事は大輔、彼も此処へ来て僕と同じような思いをしている事、彼が此処へ来れるようになったのは去年の夏からで、それまで訪れる事が出来なかった。そんな自分を弱く思っている。

去年、添えられていた花を見て、僕が此処へ来ているんだと思い、手紙を書いて伝えたかった。

謝りたい。

千里へ。そして、自分が此処に来る決心がつかなかった間にも訪れていたであろう、僕へ。

川に降る坂の前に立ち、空を見上げた。雲一つと無い、薄く青い空が広がっている。

少しの間、視線を預けていた。何かを思うわけでもなく。

そして、川辺へと目を向けた。

川辺には高く草が生い茂っていた。光を映した黄緑色の草々は、僕らの立っていた地面の土を全て見えなくしていた。

その光景は何故だか、僕の空の部分突き刺し、痛みも無く通り抜ける。

僕は何か裏切りにも似た様な気持ちを感じてしまっていた。

何処かで勝手に望んでいたのかも知れない。

あの日から、この場所は、僕の中で何一つ変わらずに自分を苦しめ

るものである筈だと。

けれど其処にあったのは、僕のどんな思いも受け入れる事さえしてくれない、ただ虚しくて寂しい場所にしか思えなかった。

暫く呆然と川辺を見渡していた。

そうしていると僕の中で、今までには無い、強い感情が生まれて来るのを感じた。

くやしい。

僕は、ただ立たされている。この川の前に。ずっと、ずっと、そうだった。僕は、ずっと……立ち続けている。

駆け出していた。

僕の中で、無音の金切り声が狂った様に回る。

坂を駆け降りて、草を掻き分け、僕は川に飛び込んだ。

僕の全身は、一瞬で水の中へと落ちた。

這い上がろうと、もがいても僕の体は水の中へと落ちていく。とにかく必死に顔を出そうとする事しか出来ない。水で視界が塞かれる中で、なんとか目の前に浮いた鞆に、しがみついた。

怖い。

僕は泳ぐ事はおろか、水の中へ顔を浸ける事さえも恐れていた。足が届かない、何度も顔が水に浸かる恐怖は、僕を早くあの川辺の所へと、もがき続けさせた。水を何度も飲み込みながら、もがき進み、やっと川辺の端に手が掛かった。

両肘を掛け、呼吸を調えながら地面の土を見つめる。
冷静になって気が付いた。

僕は泣いていた。

止めどない感情が入り乱れ、抑えきれない思いが溢れてくる。

僕は地面に顔を擦りつけ、自ら水の中に顔を浸けた。眼を閉じ、水の中で苦しくなるまで潜り、また顔を出し呼吸する。これを何度も繰り返した。

その間は、何も考えなかった。

どれくらい経ったんだろう。体の冷えを感じ、疲れて意識が朦朧とした僕は、地面をよじ上り、草むらに仰向けになって倒れ込んだ。
草の間から、ぼんやりと空を見たら、同仕様も無い程に青い空だった。

くたびれて眠った。

苦虫（9）

草に囲まれた視線の先には青。

一瞬、此処は何処かと思ったけど、草と土の強い匂いと共に、僕の感覚は少しずつ自分へと戻っていった。

僕は溜め息をつく。

何か長い夢を見ていた気がする。だけど、それが何か思い出せない……。
でも……やさしい夢だった気がした。

どれくらい眠っていたんだろうか？
空の変わらぬ色を見て、それほど長くは眠っていないと思う。

僕は時計を見た。

針はジッと動かない。壊れてしまっていた。
けれど、困りはしなかった。

こんな所だからバスの止まる時間は少ない。確か、あと昼過ぎと夕方。

昼過ぎのバスに乗れなくても、夕方には間に合うのだから。

……帰ればいい。

僕は、起き上がって服を見た。
ずぶ濡れで土や草が張り付いていて、カバンは水を随分溜め込んで

いて重い。カバンの中の水を出して、服を手で払い退けていると、僕の視線は川へ向かっていた。

口許を固く閉じ、目を逸らす。

僕は、帰り道を歩き始めた。

途中、千里の墓にもう一度手を合わせた。

紫の花が一つは錆びた円筒に、もう一つは地面に横たわっている。大輔の紫の花と、僕の紫の花……。

僕は、横たわっている花を持って帰る事にした。

帰り道、日が昇った為か、暗かった林の道に少し光が指していた。僕の背中に太陽の暖かい光が当たる。目の前にある影をぼんやりと見ながら歩いた。

大きな蟻が列に沿って動く。乾いた土から伸びてる雑草。時折、林の葉を揺らす音。

そして川の音は少しずつ、遠ざかっていく。

横道を過ぎて田圃道を抜けると、コンクリートになった。

道路端の白線の上を伝って歩いた。石ころが何度か靴の先に当たる。

バス停留所の古い小屋。その中の赤いベンチに座る。体が、ぐったりと重く感じて前屈みに俯いくと、手に持った花の香りが強く鼻に付いた。

僕は、顔を逸すと赤いベンチの錆びた所を見ていた。所々プラスチックは剥げていて、鉄を剥き出しにした部分は錆び付く。長い間、

何度も何度も雨に打たれて。

そんな事を考えていると、遠くからバスの近づいてくる音が聴こえた。

昼過ぎのバスは、まだ行っではいなかったらしい。……。

バスは停車するとドアを開けた。
立ち上がって、階段に足をかけて乗ろうとした時、誰かが降りて来るのが見えた。

僕は、呆然と見入ってしまった。

その降りてきた女性に。

白いワンピースに。

彼女は、こっちに向かって来る。

僕は、彼女を見た時の姿勢のまま、動けなかった。

彼女は僕を一度見ると顔を俯かせて、そのまま僕の背中を通り抜けて行く。

僕が彼女を目で追い掛け続けていると、彼女は一度振り返り、そして僕の方を向いて立ち止まった。

彼女の視線は僕とは合わずに、僅かに下の方へ向けられていた。

「あの……その花……。」

僕は、手に持っている花を見た。

「これは……。」

「もしかして千里を知っていますか？」

彼女から千里という言葉聞いて、僕は、さらに驚いた。
そして、少し間を置いてから答えた。

「……知っています。」

彼女は何か考えてる様に思えたが、暫くしたあと僕に言った。

「少しお話し出来ませんか？」

「……………」

「駄目ですか？」

「……いや大丈夫です。」

バスの警笛が鳴り響いた。

「ちょっと待つて下さい。」

彼女は、そう言うバスに乗り込んで行った。

彼女が降りると、バスはドアを締め動き出した。

「歩きながら話しましょう。」

僕は、彼女の後ろを付いて歩いて行った。

苦虫（10）

彼女は、道路端の白線を辿る様に歩いて行く。車の走る気配など全く無い道路を、僕は彼女の左側に付いて車道を歩いた。

彼女は、肩より少し長い黒髪を後ろで束ねていた。歳は僕と同じくらいだろうか？背も僕と殆ど変わりないと思う。彼女の足元のサンダルには小さな花が虹色に輝いていた。

彼女は何も喋らずに、ただ前を向いて歩くばかりだ。彼女の方から話をしようと言って来たのに、ずっと何も喋らないでいる。

僕は彼女に聞いた。「話って千里の事ですよ？」

彼女の返事は無かった。

僕は、もう一度声を掛ける。

「千里を……知っているんですよ？どんな関係の方なんでしょうか？」

彼女は、それでも無言のまま、前を向いて歩き続けている。

暫くして、やっと彼女が喋り出した。

「貴方の名前は？」

「俺は……です」

「そう……」

彼女はそれだけ聞いただけだった。

やがて彼女は脇道に入って行く。広くはない田圃道だったので彼女の後ろにまわった。

「私ね……千里の友達だったの」

「そうですね……俺もです、同級生だったのかな？俺と」

「ええ、貴方は覚えてないかも知れないけど……由佳、斎藤 由佳、知らない？」

彼女は振り向いてそう言った。

「……すいません、覚えてないみたいです」

「そうよね、あまり話した事なかったし……私は貴方の事よく知ってる」

「……」

僕も彼女も無言のまま歩き続けていると、あの広い横道に出た。

彼女の横に少し離れて並ぶ。僕は何か話した方が良いのかと思い、また声を掛けようとした。すると彼女は草むらの方に駆けよって言った。

「ちょっと待って」

彼女は屈んで何かをしている様だった。

「これ、綺麗じゃない？」

彼女は微笑みながら、僕に白い花を見せる。

「ええ……、綺麗だと思います」

僕は少し無愛想に答えてしまった気がした。

「私ね、千里への花はこの辺りに咲いてるのを持って行くの、貴方のその花は？」

「買ってきました」

「とても綺麗な花ね」

彼女はそう言って、また歩き出す。

僕は彼女と一緒に、この横道を歩いていて不思議な感じがした。ま

るで……。

けど、それが言い様の無い感覚で、良い感じはしなかった。

あの坂道に近づいて来た頃、僕は言った。

「俺、やっぱりやめます、少し疲れたんで戻ります」

彼女は、立ち止まって僕を見る。その顔も、どこか似ている様に感じてしまっていた。

「そうなの？……でもその花、どうするの？」

「いいんです、千里の墓へは行っただ、これは……あんまり良い花じゃない気がして……また今度、別の花を持って来ます」

彼女は少し不思議そうな顔を向けていた。

「綺麗な花だと思うけど……私、一人で行くより貴方に一緒に付いてきて欲しいんだけど、一人だと……ね？」

僕は暫く考えた末、仕方なく付いて行く事に決め、頷いた。

林道を歩いている間も殆ど話しなどせず、彼女が時たま一言、二言話し掛けて来るくらいだった。今日は暖かいだの、付いて来てくれて良かった……そんな事だった。

道中、それでも不思議な光景に思えてしまう。僕は、そのたびに彼女から意識を逸らし、林の奥の方なんかを見ていた。川の音が耳元で小さく反響する。

千里の墓の前で彼女と僕は立ち止った。

彼女は屈むと、手に持っている花を添える。

紫の花と白い花が重なるのを、僕は少し離れて見ていた。

「誰かしら？この花？」

彼女のその言葉に、僕は何も答えずにいた。そして、手紙を無くしてしまった事を、ふと思った。

「貴方の花……何であげないの？」

彼女は立ち上がり、僕を見る。

「……いいんです、ダメなんです」

「何がダメなの？」

「貴女には関係ない事です、俺がそう言ってるんだから、別にいいじゃないですか」

そう言い放った時、彼女の瞳が強くなった様に見えた。

「なら、私に出来ない？」

持って帰るくらいならと思い、僕は彼女に花を差し出す。

「ありがとう」

彼女は微笑みながら、そう言った。

帰り道……そう、今日二度目の帰り道。

林道は昼を過ぎたためか、光は強く射さない。落ち着いて見えた。

意味もなく林の奥を見たり、空を仰いだりして……時々、彼女を見る。彼女は紫の花を両手で持って、ゆつくりとしたリズムで歩く。彼女の横顔を見ると、微笑んでいる様な……いないような。

初対面であるのに不思議と抵抗感などは無かった。そう……。

僕は独り言の様に呟いた。

「小学校……まだあるのかな」

「あるわよ」

彼女は、僕の方を見て間を空けずに言った。

「へえー、まだあるんだ」

「もう使われてはいないけどね、残ってる……行ってみない？バスの時間まで、まだ大分あるでしょ？」

「ん……」

「嫌なら……やめる？」

僕はバス亭で一人待つ事も考えたが……。

「行きます、確かに時間もまだあるし」

林道を抜け、横道を歩き、小学校への道を歩く。

その間、僕が行くと答えた時の彼女の笑顔が、色濃く残っていた。

苦虫（１１）

僕と彼女は、軽斜な坂道を歩いている。

小学校は丘の上にあつて、ほぼ毎日この坂道を登つて登校していた筈なのだけれど……こんなに辛いとは思わなかった。

「こんなに大変だったかな……よく毎日、登つてたな……」

僕がそう言つと彼女は少し笑つた。

「そうね、小さい時はもつと楽だったかも」

「走つて登つた記憶があるもんな……信じられない」

「走つたら？」

彼女が、からかい言つた事は分かるけど、僕は面白半分に走つてみせた。

「ちょっと待つ……」

声が途切れたのを聴いて振り向くと、彼女は蹲まり膝を手で押さえていた。

「大丈夫ですか？」

駆け寄つて彼女を見ると膝の辺り、白いワンピースの裾近くに小さな赤が滲んでいた。彼女は俯いていた顔を上げて、微笑みながら僕を見る。

「転んじやつた……」

「立てますか？」

「へいき、へいき、このくらい」

彼女は膝を手で払い、歩き出す。

この時、僕はまた千里を思い出した。同じ様な事があつた……たしか……。

「どうしたの？」

彼女が振り返り、僕に声を掛けた。

「いや、なんでも……」

地面を見ると紫の花びらが一枚落ちていた。その花びらは風に吹かれ、まるで蝶が地べたを這う様にして、僕から遠退き坂を上がってゆく。

僕は彼女を追いつけた。

小学校を目の当たりにした僕は、懐かしいというよりは、ああ、こんな感じだったかなと思う。

二階建ての木造校舎は案の定、大分傷んでいるように見える。

体育館などは無く、校舎前が体育の授業で使われるグラウンドだった。雨の日は教室で別の授業……大輔が一番、文句を言っていた……。

「開かない」

そう言って、彼女は校舎の入口で佇んでいる。僕は彼女に向かって言った。

「窓とか開かないかな？」

僕は教室の窓を引いてみたが、鍵が掛かっていて動かなかった。

「開かない。そっちは？」

「……開いた」

隣の窓を調べていた彼女は、僕に拍子抜けした様な顔を見せる。彼女の方に近寄ってみると、確かに窓は開いていた。

「これ持つて」

僕に花を手渡すと、彼女は窓から入り込もうとする。

「大丈夫ですか?……」

「大丈夫。痛っ……」

窓の中に転げ落ちた彼女を、僕は直ぐに窓を覗き込んで見た。彼女は床に手を付き倒れていたが、振り向いた彼女は僕に笑顔をつくった。

「また転んじやった」

「何ともないですか?」

「ええ、大丈夫」

彼女は立ち上がり僕に手を差し伸べた。花を手渡すと、彼女はそれでも手を差し伸べている。

「ん?……」

どうやら彼女は僕に手を貸してくれているらしい。けれど、僕は彼女の手を無視して窓枠に手を掛けた。

「いいですよ、べつに……」

僕は降りる際に、彼女の顔をチラッと見た。彼女は、ただ僕を見ている。光が遮られているからか、彼女の表情が少し冷たく思えた。

教室に入ると古い木の匂い、それから湿気臭さが漂ってくる。

どれくらい使われずにいたのだろう。黒板、先生の机、時計……針は止まっていた。生徒の机は丁寧に右の方へ積まれていて、その隙間から小さな黒板、木枠の物入れが見える。掃除用具のロッカーも静かに立っていた。

僕は足下を見て、靴を床の上で滑らせる。足跡が残る程、積もった埃……大分経っているに違いない。

窓から射す日の光で、目の前に埃が舞上がる。……彼女の姿が教室から消えていた。

「斎藤さん?……」

教室から廊下へ出て見たが、彼女の姿は無い。廊下は教室とは違って仄暗かったが、床のずつと延びた先に光が射し込んでいた。

廊下を歩いて行くと隣の教室が硝子越しに見えた。同じ様に机などは隅に置かれ、床がただ広がっている。

右の壁に何も書かれてはいない提示版があつて、その先の角から二階への階段が見えた。

一階には一、二、三年の教室。二階には四、五、六と教室があつた。生徒数は多くはないから二組が普通だったけど、その年によつては一組だけの学級もあつた。

四年二組……。

ミシミシと音を立てる階段を上がり、二階の教室を見渡したが彼女の姿は見えなかった。

僕は四年二組の教室の前で立ち止まる。

札が無ければ、それと気付かない、同じ様な教室……。

僕は教室に入つて、中央に立つた。何故だか窓が一つ開いていて風が入り込んでくる。生暖かい風が肌に触れて……僕は揺れていた。

「……さん」

名前を呼ぶ声に振り向く。彼女はそこにいた……紫の花を手にして。僕の視界は急にボヤけて、暗くなる。気が付くと床に手をつき倒れていた。

「大丈夫!？」

「……ええ……ちょっと目眩がしただけです」

「……座る?」

「……少し……すいません」

僕は彼女が持つて来てくれた椅子に座る。凄く小さくて低い椅子だった。足を伸ばして脛を閉じると、風の音が小さく耳に届いてくる。

まだ、きっと春なんだ……。

僕は外の景色を見た。その中に彼女の後ろ姿が入り込む。彼女は開いている窓から外を眺めていた。弱い日の光に照らされた後ろ姿は、何か彼女だけが本物の様に感じてしまう。

使われずに時の止まった教室の中。

外の風景は記憶から知らずの内に変わり離れていく。

彼女は……どちらでもない。

「貴女が千里にみえる」

「え？」

「貴女が千里に思えて……僕は………苦しい」

「………」

「俺の話を聞いてもらえませんか？」

「………話？」

「貴女に聞いて欲しい」

「………はい」

苦虫(12)

「千里が川で亡くなった事は……知ってますよね」

「はい……」

「俺は、そこに居たんです」

「……」

「もう一人の友達……男の子と一緒にあの川にいました」

彼女の方は見ない。黒板だけを見ていた。何も書かれていない深緑のその場所に、白いチョークで書いて見せなければいけない様な気持ちになる。

彼女に俺の事を。

「この話……初めてなんです。人に話すの」

彼女の声を暫く探す様に待っていた。声は無かった。

あの日を振り返り、俺は彼女に話す。

「その日、白いワンピースだった。あと……ペンダントしてた」

「……ペンダント」

「写真とか入るやつ。そう思った。友達が見せてって……千里に言っただけです。千里は嫌がった……俺も見たいと思った。だから近寄って千里に……触れてしまったかもしれない」

そしたら……

「そしたら落ちた」

俺は振り向いて、もう一度言った。

「落ちたんです」

「……………」

黒板に向き直って、俺は続けた。

「友達は何とかしようとした。でも、どうにもならなかった。川に入って……助けようとした。けど……無理だった」

「……………」

「俺は、どうしたと思います？」

振り向いて待った。

俺は言った。

「立って見てたんです」

この時、初めて正面から彼女を見た気がした。彼女は疑いもなく、今日、初めて会う人だった。

「どう思いますか？」

「……………」

「俺をどう思いますか？」

「わるくない……」

「どうしてですか？どうして、そう言えるんですか」

「……………」

「俺が押してしまったのかもしれない。突き落としてしまったかもしれない」

「やめて……」

「そして見殺しにしたんですよ」

「やめて！」

「俺は！千里を殺してしまった！」

彼女は蹲った。そして泣き声が耳に響いてくる。俺は彼女を泣かしてしまった。

ただ、彼女の泣き声だけが入ってくる時間の中に座っていた。

「どうして？」

彼女は顔を隠したままで言った。俺は黙っていた。

「どうして、そんなこと言うの？」

「……………」

「貴方が千里を殺す筈無い……………でしょ？」

顔を上げた彼女の目を見る。涙で濡れた、その瞳に負けそうになっ
てしまう。俺は耐えていた。

「そうでしょ？」

「俺は立って見ていた。ずっと、そこに居た。何もなかったんで
すよ」

「……………」

「許せる筈ないでしょう？……………どうすれば……………許して……………くれる
んですか」

私は、ここでペンを置く。そして原稿を引き出しの奥にしまいこむ。

何故なら私は、この先を書く事ができない。

私は『後悔』をテーマに、この小説を書き出した。そして、これに
『過去』・『死』という、どうやっても変えられない事実を持ち出
した。

私は当初、この『後悔』・『過去』・『死』を小説。物語として書き上げようと葛藤していた。

しかし、小説も奇なり。書いていくに連れ、二転三転するものである。

その一つに彼女、斎藤由佳が現れた事だった。

彼女は、主人公……彼にとって『救い』となるべく現れるのであるが。この物語の中での『救い』とは、主に彼……僕の過去を彼女へ告白する事にある。

しかしながら難しいのは彼女、斎藤由佳は、彼に嘘をついているという事だ。

彼女は、千里の姉である。

この事実とは、後に主人公、彼が帰りに校舎から坂道を下る際に気が付く。

彼は「前にも同じ様な事があった」と言っている。

彼女と校舎で別れた彼は以前、過去に坂で転んだ千里を家まで送って行った事を思い出す。そこで、手当てしてくれた人……姉の存在に初めて気が付くのである。

彼は何故、気が付かなかったんだと悔やみ彼女に尋ねるが、彼女の「ごめんなさい」と言う言葉に、彼は本当の事は聞かない事にする。

と、先はこんな感じであった。

確かに彼が彼女へ（誰であっても）告白したからと言って全てが解決する訳では無い。けれど私は思ってしまう。では、どうすれば彼を救い出せたのだろうかと……。

私はペンを置く。

私は『彼の』孤独や後悔を知らない人間である。それは斎藤由佳……

…彼女と大輔も同じだ。しかし彼女は今、誰よりも『近い』のだ。

この後、彼女は彼に声を掛けるだろう。接するだろう。
どんな言葉だろうか？

きっと、それが彼を救う、小さな一つの大切な想い、言葉だと信じている。

苦虫（完） 作・工藤

苦虫（12）（後書き）

読んでいただき

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0964p/>

苦虫

2011年10月8日11時02分発行